ISSN－0913－1906
関西大学博物館彙報
平成24年３月31日 発行

阡陵

No. 64

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]

白磁龍耳瓶　(White Porcelain Vase with Dragon-Shaped Handles)

◉ 目　次 ◉

夜神楽の季節 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 黒田　一充　2
「豊臣期大坂図屏風」デジタルコンテンツの制作について ・・・・・・・ 井浦　　崇　4
寄生虫文化と20世紀初頭の駆虫薬 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 内野　　花　6
和歌山県での台風12号被災資料の救出･保全活動 ・・・・・・・・・・・ 伊藤　信明　8
弥生文化博物館の試み ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 正岡　大実　10
太閤が愛したやきもの ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 熊　　博毅　12
最近の近畿圏大学博物館事情 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 石立弥生子　14

関西大学博物館
〒564-8680　大阪府吹田市山手町３丁目３番35号
Tel. 06-6368-1171（直通）　Fax. 06-6388-9928
http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/index.html

夜神楽の季節

黒　田　一　充

稔りの秋になると、豊作を神に感謝するために祭りがおこなわれる。秋祭りは９月下旬から11月初旬にかけておこなわれ、出雲に神々が集うという旧暦の神無月をはさんで、冬祭りの季節に入る。旧暦霜月の祭りでは、収穫の感謝とともに、村人の親睦も兼ねて神楽が奉納されるところが、とくに山間部に多い。霜月祭に奉納されるため、霜月神楽とよばれるが、新暦になった現在では、11月下旬から２月下旬にかけておこなわれるようになっている。

神楽は当番の個人宅を神楽宿とし、屋内に神庭（にわ）を設けておこなわれていたが、神社の境内や村の集会所などに変わり、日程も観光客向けの短縮版や、日神楽といって昼間や遅くなっても夜半までに終わるところが多くなっている。しかし、夕方から朝まで夜通しで神楽が舞われるのが、本来の姿であった。

舞手も見物人も、厳しい寒さと睡魔に耐えながら長い夜を過ごすのだが、夜明けのころに合わせて、人気のある演目が奉納される。島根県の出雲や石見神楽では、八岐大蛇（やまたのおろち）が登場して素戔嗚尊（すさのおのみこと）が退治する舞が演じられる（写真１）。

写真１　石見神楽の「大蛇」（有福温泉神楽団・2011年撮影）

宮崎県の神楽では、天の岩戸に籠った天照大神を誘い出すために、天鈿女命（あまのうずめのみこと）が岩戸の前で舞い、続けて外の様子をうかがうために隙間が空いた岩戸を手力雄神（たちからおのかみ）が放り投げる舞いが演じられる。日の神の出現と実際の夜明けの時間を重ねることによって、太陽の光の恵みを実感するように演出されている。

写真２　高千穂神楽の「手力雄」（高千穂町上野地区・下組・2011年撮影）

通しで見ることで、理解できる演出もある。岩戸の様子を探る手力雄神の神面（写真２）と、岩戸を放り投げる際の神面が、鈿女の舞をはさんで白色から赤色に変わっている。顔を真っ赤にするほど全身の力をこめて、岩戸を開けていることを端的に表現している（写真３）。

写真３　高千穂神楽の「戸開」

地域によって異なる演出もある。宮崎県北部の高千穂神楽では、天照大神の神像を祀った小祠の前に岩戸を置くのに対し、県南部の銀鏡神楽では、屏風を岩戸に見立て、その中に女面を着けた少年が天照大神に扮して座す。岩戸を開くのも、手力雄神ではなく、戸破明神になっている（写真４）。この二つの地域は、外注連や外神屋（ごうや）とよばれる屋外の祭壇の供え物も異なり、高千穂が籾種を入れた俵なのに対し、銀鏡

では祭りの期間に獲れた猪の頭を並べる（写真5）。肉は調理して、猪狩りの様子を見せる演目の「シシトギリ」が終わると、参加者に振る舞われる。

写真4　銀鏡神楽の「戸破明神」（西都市銀鏡・2008年撮影）

写真5　銀鏡神社大祭に献納された猪の頭

神楽の内容は、祈願や浄めの舞、神話の中の話のほかに氏神などの土地の神々も登場する。土地の神が現われると、問答がおこなわれることが多い。

高千穂町上野地区では、未明に演じられる「地割」という演目で、荒神が登場する。竈のある神楽宿の台所で祓いの神事をおこなった後に、神楽が演じられる神庭に現れるが、その際、荒神の裾を女性たちが引っ張る所作がみられる。そして舞いが終わると、荒神が籾俵の上に腰掛けて神主と問答をする（写真6）。問答によって怒りを鎮めた荒神は、家の守護神となって神主に矢と杖を授け、神主は神酒を献上する。

長野と愛知・静岡の県境地域でも、霜月神楽は盛んにおこなわれている。とくに、奥三河の愛知県東栄町や豊根村の花祭が有名である。ここでは、当番の家を花宿とよび、その土間に竈を設けて大釜で湯を沸かし、その横を舞庭（まいと）として、子どもたちの「花の舞」から順に年齢ごと

写真6　高千穂神楽の「地割」：荒神と神主の問答

に異なる舞が奉納される。花祭では、夜中に鬼が登場する。山見鬼・榊鬼が順に登場し、夜が明けると竈で焚いた湯を見物人たちに振りまく湯ばやしがおこなわれて、茂吉鬼（朝鬼）が登場する。これらの鬼の中で、榊鬼が禰宜と問答をし、山の神であることを名乗る（写真7）。

神楽の演目の中で問答がともなうのは特別なものであり、氏神や荒神、鬼などその姿は異なるが、いずれも土地の神が神楽宿を訪れることによって、その家の繁栄を祝うためにおこなう特別な演目なのである。

写真7　花祭の禰宜と問答をする榊鬼（東栄町布川・2008年撮影）

このように、古くから伝えられてきた神楽も、後継者難の問題があり、花祭は東京など他所の人びとの応援で維持されているところもある。高千穂町上野地区では、5歳の男児から舞いの練習を始めるそうだが、昨年学生たちと訪れた際には、夜中にもかかわらず、演目の合間に4歳の男の子が大太鼓を立派に叩いていた。伝統の継承がうまく続いていることを感じた。

文学部教授

「豊臣期大坂図屏風」デジタルコンテンツの制作について

井浦　崇

「豊臣期大坂図屏風」は、現存例の極めて少ない「平和に繁栄する豊臣期の大坂を描いた作品」である。オーストリアで発見され、2007年に関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターと大阪城天守閣、オーストリアの州立博物館ヨアネウムの三者間で研究協定が結ばれ、共同研究が行われた。

2011年の7月に開催された国際シンポジウム、「再び『豊臣期大坂図屏風』を読む―人物・意匠・城郭・生業・年中行事―」で屏風の細部を検討するにあたって、参加者に基本的な知識を周知させるためのデジタルコンテンツを制作した。制作にあたっては所蔵先のエッゲンベルク城博物館の協力を得た。このコンテンツを使用して内田吉哉氏（関西大学大阪都市遺産研究センター特別任用研究員）とともに「屏風案内」を行った。その後8月には堂島リバーフォーラムで行われた「ナレッジキャピタルトライアル2011」において別バージョンを出品し、現在も引き続き改良を加えながらWebコンテンツとして一般公開を予定している。

国際シンポジウムのための「屏風案内」は、15分程度で簡潔に屏風を解説することを目標としてFlashで制作した。主に3つのパートに分けられ、それぞれ屏風がヨーロッパでたどった経緯、屏風全体の画面構成、屏風に描かれた景観について解説している。

まず最初のパートでは、現在屏風を所蔵しているオーストリア・エッゲンベルク城の地理情報から展示状況、歴代城主と屏風との関係などをまとめている。

歴代城主の説明画面

そして屏風を現代地図と照らし合わせながら、描かれた次の場所の地理的関係を図説した。

・大坂城　・八軒家の船着場　・高麗橋　・住吉大社　・四天王寺　・宇治平等院　・石清水八幡宮　・天王山（宝積寺）

地理的関係を図説

地理的関係や建築の外見は屏風の中で大きくデフォルメされており、容易に現在の大阪と重ね合わせることができない。そこで屏風の画像と地図が連動したインタラクティブなシステムを使った図説を行なった。特に京都～大坂間が描かれた第8扇は距離、方位ともに歪みが大きいため、別画面で図示した。そして最後に、屏風に描かれた景観で場所が特定されたものを、現在の風景写真と対比しながら解説している。

「ナレッジキャピタルトライアル2011」では24面タイルド・ディスプレイによる高解像度表示を生かした別バージョンを展示した。

エッゲンベルク城は現在世界遺産であり、城内の壁にはめ込まれているこの屏風絵は、日本で実物を鑑賞することができない。そこで実物以上に拡大した画像を合計4096×11520ピクセルの高解像度で鑑賞できるコンテンツを制作した。さらに「屏風案内」で制作したコンテンツをもとに、地理的関係図説と、現在風景との対比の解説表示を組み込むことで鑑賞者に屏風の

24面タイルド・ディスプレイ展示風景

解説を行っている。会場ではiPodを使ったマルチタッチコントローラーを操作して、解説者と鑑賞者が屏風の表示操作を行った。

Webバージョンでは国際シンポジウムの「屏風案内」において口頭で説明していた内容が文章で表示され、ユーザーがインタラクティブに操作できるようにしている。

Webバージョンのトップページ

特に地理的関係と現在風景との対比を一つのインターフェイス画面に収めることで、描かれた内容をわかりやすく解説することに努めている。まず各地名のボタンを押すことで地図上の位置関係が表示され、横の「現在の風景との比較」ボタンを押すことで現在の写真との比較に

「現在の風景との比較」画面

Webバージョンの地理図説

切り替わる。

屏風の視点が北側から大坂城を見ていたため地理関係がわかりにくかった点も、北を下とした地図の表示で解消を試みた。

これら一連のデジタルコンテンツは、もともと国際シンポジウムの入門解説用として準備したこともあり、情報を整理して教育的効果を高める工夫が重ねられている。複雑な来歴を持ち、未だ不明な点も多い屏風であるが、明らかになった要素を丁寧に図示することを重視した。

今後の課題としては、新しい研究成果を盛り込む過程で、増えていく情報を整理する工夫が必要となる。そのためには、情報の分類と配置を常に再検討することが重要だと考えられる。たとえば「エッゲンベルク家の家系図」という項目が今はトップのメニューにあるが、他の情報が増えてくると「屏風についての詳細」の一部に組み込むか、あるいは他のエッゲンベルク城の紹介情報と一緒にまとめるといった再編が考えられる。

今後の発展性としては、「デジタル洛中洛外図屏風 島根県美本」（淡交社）のように鑑賞ブラウザのインターフェイスに統合検索システムを組み込むような高度なシステム開発も考えられる。しかし、新発見の「豊臣期大坂図屏風」は来歴や全体構図などの基本情報をまず充分に解説する必要があり、教育的効果を特に優先することになった。その結果、情報の種類ごとに適したナビゲーションを検討し、ユーザーが自然に扱える形態となった。今後もこの手法を展開していく場合は、常に柔軟な発想で情報伝達のためのデザインを考えることが重要といえるだろう。

総合情報学部助教　大阪都市遺産研究センター研究員

寄生虫文化と20世紀初頭の駆虫薬

内　野　　花

古来、ひとびとは体内には「虫」が存在し、その「虫」が暴れると疾病が発生したり、感情が起伏したりすると信じていた。「三尸九虫」の思想である。なかには、実際に存在する回虫や蟯虫、条虫などの寄生虫はもちろん、想像上の「虫」もあった。幼子が泣きやまないときは、「疳の虫」が身体の中を這っているからであり、何か悪い予感がする時や不安な時に「虫の知らせ」だと感じた経験をお持ちの方もいるだろう。庚申信仰で知られる三尸の思想と相俟って、「虫」はひとびとととともに暮らしてきたのである。事実、そうした空想上の「虫」は絵画に描かれたのであり、色鮮やかな虫たちは寄生先を求めて今にも紙上から跳びだしそうである[i]。

ヒトに寄生する虫の代表格として、回虫・蟯虫・条虫がある。これら寄生虫は周知の通り、経口感染する。人糞を肥料とした農業の普及や、手洗いの不徹底、魚介類の生食などにより、寄生虫は広くひとびとの身体に入ったのである。また、医書[ii]や文学作品[iii]などにも寄生虫に関する記述があることから、寄生虫への対処に苦労していた様子を読み取ることができる。

さて、この寄生虫であるが、なかでも回虫は日本ではごく最近まで、大半の国民の体内に存在していた。主要因は、人糞を肥料とした農作物にあった。もちろん、寄生虫の類いは熱に弱く、加熱処理することで死滅する。第二次世界大戦以降バブル成長期までは、生野菜を食べる習慣は現在と比べると少なく、外食時にカツフライなどの付け合わせとしてでてくる千切りキャベツなどのサラダ程度だったが、漬け物や酢の物は頻繁に食べていた。その間、農薬や化学肥料が開発・改良され、駆虫剤の改良もすすむと同時に、「衛生」概念がひとびとの間に浸透、さらには農作業が機械化・効率化していったことで、回虫保有者は減少した。しかし、過度の農薬・化学肥料に対する反対や「ナチュラル志向」が強まるにつれ、人糞肥料による農業への揺り戻しがおこり、生野菜の食習慣が一般化していた現代人の体内に、回虫はこっそりと「戻り」かけていた時期もある。大きな揺り戻しもおさまった現在、やはり保有者は非常に少なくなったと言える。では、医薬の進展によってさまざまな駆虫薬が開発される以前、ひとびとは寄生虫をどのように捉え、またどのような方法で駆虫していたのであろうか。

7世紀初頭の中国・巣元方が記した『諸病源候論』巻18に、

> 九虫者、一曰伏虫、長四分。二曰蛔虫、長一尺。三曰白虫、長一寸。四曰肉虫、状如爛杏。五曰肺虫、状如蚕。六曰胃虫、状如蝦蟇。七曰弱虫、状如瓜瓣。八曰赤虫、状如生肉。九曰蟯虫、至細微、形如菜虫。

とあり、当時は9種類の「寄生虫」が存在すると考えられていた。この記述は日本の医書[iv]にも継承されており、この9種類の「寄生虫」と、人の罪過や悪事を天帝に報告するという「三尸」が信じられていたのである。当然のことながら、存在する寄生虫と想像上の「寄生虫」や「三尸」を退治するため、ひとびとはさまざまな薬を試しては、効能の有無を明らかにしていった。16世紀の薬学者・李時珍の大著『本草綱目』にも、諸虫の項に、どんな薬がどの「虫」に有効なのかについて、記されている。そこには、実在の蛔虫（回虫）や蟯虫、寸白（条虫の一種、サナダムシのこと）についてはもちろんのこと、想像上の「三尸」や「疳虫」などにも効く薬が90種余り載っており、その種類の多さからもひとびとの生活と寄生虫が非常に密な関係にあったことがうかがえる。

近年の駆虫剤としては、製薬メーカーから各種駆虫剤が開発・販売されているが、なかでも藤沢友吉商店（のちの藤沢薬品工業、現・アステラス製薬および第一三共ヘルスケア）が大正期に販売し、現在まで改良を経ながら続いているマク

写真1　海人草

ニンがよく知られている。マクニンはその苦味ゆえに小児が敬遠したため、糖衣錠やゼリー（水飴）状のものも販売されており、贈答品としても使用されていたことが昭和初期の新聞広告[v]からわかる。また、このマクニンに類似した「マクノール」を製造・販売していた製薬会社もあった[vi]という。マクニン・マクノールともに、開発・発売当初の原料や経緯については、残念ながら資料が残っていないため不明だが、日本では紅藻の海人草（マクリ・写真１）が駆虫薬として古くから使用されてきたこと、創業者・藤沢友吉が薬種商であったこと、また大正14（1925）年に「藤海人草」（「藤山印カット海人草」）として海人草が販売されていたこと、昭和３（1928）年の新聞広告[vii]に「サントニンを凌ぐ」「蛔虫駆除薬マクニンが主薬」とあること、昭和27（1952）年に、海人草と輸入サントニンを主原料とした「マクニンＳ」が発売されたことなどから、海人草をはじめとする生薬が原料であったと考えられる。

そのマクノール錠が関西大学博物館に収蔵されている（写真２）。直径10mm、最長60mmの小さなガラス管に、融解して一部再結晶化した黒褐色の錠剤（直径約7.0mm、厚さ約3.0mm）が３錠残っている（写真３）。ガラス瓶には、「虫下シ」「憫苦寧爾　マクノール錠　12錠入」「製造元 大和産業株式会社薬品部　神戸市外本山村小路大町十三」のシールが貼られており、小さなコルク片で蓋をされている。収蔵当初よりガラス瓶は損傷していたが、現存の錠剤の１つあたりの大きさから、おそらく全長70mm程度の小瓶だったと推察される。

写真２・３　関西大学博物館所蔵のマクノール錠

この錠剤の来歴だが、東洋学者として著名な内藤湖南（1866-1934）の欧州旅行時に持参した鞄のなかから発見された。湖南は中国や朝鮮半島への海外学術調査へ何度も赴いているが、一度だけ欧州へ赴いている。大正13（1924）年７月から翌14（1925）年２月にかけてである。いつ購入されたか、いつ使用したのかについては不明だが、出発前年の春３月に胆石症による胆嚢摘出手術を受け、体調の思わしくなかった湖南にとって、寄生虫は是が非でも避けたいものであったのだろう。

マクノール錠の含有成分であるが、含有可能性の高い江戸期から昭和期にかけて駆虫薬として多用されていた生薬（海人草・使君子・柘榴実皮・艾葉・桂皮）の含有有無分析を、名古屋市立大学薬学研究科准教授の牧野利明氏に依頼した。薄層クロマトグラフィー（TLC）による生薬確認試験をしていただいた結果、高極性の化合物は含有されているようだが、どの生薬も検出されなかった。低分子有機化合物の含有は見込めない分析結果だったが、江戸時代後期に記された『秘伝大人小兒衛生論』[viii]や『蔓難録』などに、海人草[ix]をはじめ、檳榔子や半夏、茯苓など多様な生薬をあわせた駆虫薬が記載されていることや、80年以上前に製造された錠剤で酸化が進んでいることをかんがみると、生薬の含有を完全には否定できない。

明治７（1874）年の医制発布による西洋医学教育への移行や社会生活の変化によって庶民生活から縁遠くなった生薬だが、マクニン錠やマクノール錠、その他の薬剤に関する資料が発見・分析がすすめば、20世紀初頭の生薬利用の実態をさぐる一端となる。歴史学と薬学のさらなる共同研究の進展が望まれる。

【付記】本稿は、平成23年度笹川科学研究助成（人文分野）「ベトナム芳香性薬物の史的研究」（研究番号23-111）の研究成果の一環である。

i　鍼師・茨木元行が永禄11（1568）年に記した『針聞書』（九州国立博物館所蔵）が著名である。

ii　『黄帝内経』（霊樞・上膈）や『ヒポクラテス全集』（疾病について第４・第23章）、『スシュルタ本集』（補遺・第54章内臓寄生蟲病治療法）などに体内の寄生虫や寄生虫に起因する疾病についての記述がある。また、享和２（1802）年、柘植彰常がわが国最初の回虫病専門書『蔓難録』を著した。

iii　『今昔物語集』（巻24第７典薬寮に行きて病をなほしたる女の話）に寸白治療の記述がある。

iv　本郷正豊『鍼灸重宝記』（享保３（1718）年）

v　『大阪毎日新聞』（昭和２年7月26日５面）

vi　『台湾日日新聞』（昭和16年８月18日「台湾物価調整の諸問題」）

vii　『大阪毎日新聞』（昭和３年4月26日12面）

viii　寛政７（1795）年に本井了承が著した養生書である。

ix　『蔓難録』には「鷓鴣菜」と記載されている。

大阪大学コミュニケーション・デザインセンター特任講師

和歌山県での台風12号被災資料の救出・保全活動

－歴史資料保全ネット・わかやまの活動－

伊　藤　信　明

組織の立ち上げと活動の概要

2011年９月２日から３日にかけて、和歌山県を襲った台風12号は、大型で動きが遅かったために記録的な大雨をもたらし、各地で河川の氾濫や土砂崩れ、土石流を引き起こした。特に、県中部日高地方の日高川流域と、南部熊野地方の富田川・古座川・太田川・那智川・熊野川流域の被害が大きかった。和歌山県の総合防災課が11月30日に取りまとめた被害状況の最終報告「平成23年台風12号に伴う被害状況等について（最終報）」では、死者52人（うち災害関連死２人）、行方不明者５人、負傷者９人、建物の全壊371、半壊1842、一部破損172、床上浸水2680、床下浸水3147、浸水被害1592と発表されている。

那智勝浦町市野々で発生した土石流

このような甚大な被害を受けた地域では、そこに伝えられてきた歴史資料も被災したことは明らかであった。被災後の混乱した中でも、国・県・市町村の指定を受けた歴史資料は比較的早くに救出・保全の対象となると考えられたが、その他の数多くの歴史資料はそのまま捨てられてしまう懸念があった。このような状況を危惧した和歌山市内の歴史研究者、文化財担当職員、博物館・図書館・文書館関係者、その他有志の人々は、ボランティア団体「和歌山県豪雨被害歴史資料保全対策連絡会」（略称「歴史資料保全ネット・わかやま」）を組織した。そして、和歌山大学紀州経済史文化史研究所の「豪雨被害歴史資料保全対策プロジェクト」と連携しながら、被災資料のレスキュー活動を開始した。

「歴史資料保全ネット・わかやま」は、９月22日に第１回目の会議を開き、９月末日から11月初旬まで、断続的に被災地に入って被災資料の調査・確認や応急の保全処置を行った。また「豪雨被害歴史資料保全対策プロジェクト」により紀州経済史文化史研究所が那智勝浦町から預かった被災資料（卒業アルバム・文集など23点と仏像）については、和歌山大学の学生と共に、10月末日から12月末日まで、泥落としや消毒などのクリーニング処置と簡易な補修を行った（10月31日付産経新聞を参照）。処置の終わった資料は2012年１月12日に那智勝浦町へ返却し（１月13日付朝日・読売・産経新聞の和歌山版を参照）、今回の台風被害に伴う活動は一先ず区切りを迎えた。

和歌山大学でのクリーニング作業

被災地での活動

和歌山県では、これまでボランティア団体を組織して被災資料を救出するという活動実績は無かった。そのため、技術や資金など様々な場面で神戸の歴史資料ネットワークの協力を得ながら、組織を立ち上げていった。これと並行して、被災地の自治体史編纂関係者や文化財担当職員、地域の歴史研究団体の代表者などに連絡を取り、被災地の歴史資料に関する情報収集を行った。

和歌山県では40年ほど前に全県的な古文書調査が行われ、その成果が『和歌山県古文書目録』全11冊にまとめられていた。この目録には、歴

史資料の被災が考えられる日高川町・田辺市・串本町・古座川町・太地町・那智勝浦町・新宮市・北山村に合計127家が掲載されており、この資料の情報収集と状況確認も必要であった。

被災地での活動は、役場の総務や防災担当部署を訪ねてチラシを渡し、住民の方々に対して「歴史資料保全ネット・わかやま」の活動趣旨の周知をお願いすることから始めた。このチラシは、「捨てないでチラシ」と呼んでいて、被災した紙資料・写真・民具等は捨てないで、その資料の情報や保全・修復については連絡をしてほしい旨を訴えた。

被災地の調査では、古座川町・田辺市本宮町・新宮市熊野川町では、町史編纂に用いた資料や、『和歌山県古文書目録』掲載資料の安否確認が進んだが（もちろん未確認資料も残されている）、多くの公文書が被災していたことや、被災してすでに廃棄された公文書があることも分かってきた。古座川町では、公文書の書庫が浸水していた。また学校も浸水したとの情報があり、学校を訪ねて所蔵資料の状況確認を行った。水損した資料にカビが発生していて、応急のクリーニングを行った学校もあったが、古座川の増水を懸念して、所蔵資料を校舎の上階へ避難させて助かった学校もあった。田辺市本宮町では、本宮行政局（旧本宮町役場）にあった近年の公文書や、明治期の地籍図の被災も確認された。調査の時点で被災時から50日以上が経過していたため、地籍図は板状に固着し、資料全体にカビが発生していた。ほとんど手の施しようが無く、これ以上のカビの発生おさえるため、エタノールを噴霧することしかできなかった。

被災した地籍図の現状確認作業

活動を通じて感じたこと

活動の取り掛かりとなった『和歌山県古文書目録』掲載の資料は、平成７年の阪神淡路大震災を受けて、和歌山県立文書館が行った民間所在資料保存状況調査（平成９年～17年）で追跡調査を行っていた。この調査事業では、災害時に素早く有効な対応ができるように、歴史資料がどこに、どのように、どのくらい保管されているのか、前もって把握しておくことも意図されていた（この調査に関しては、龍野直樹「地域資料保存事業への思考と試行」『和歌山県立文書館紀要』６号を参照）。今回の災害にあたっては、この調査の成果を持つ和歌山県立文書館の積極的な行動がなかったこと（加えて被災公文書に関しても）は、とても残念であった。

被災地での活動は、被災後一ヶ月が経った頃から本格的に動き出したが、これは今から振り返ると遅すぎたのではないかと感じている。この時には、初期の復旧活動を行った自衛隊は撤収、建物の泥出しもほとんど終わり、被災した家財道具などは大半が片付いていた。誰にも知られることなく消えてしまった歴史資料が、恐らくあっただろう。また、早くから活動できていれば、本宮の地籍図はもう少し良い状態で残せたはずである。しかし、被災後は人命救助と生活再建が第一であり、被災資料に対する活動をどの時点で始めるのかは難しい問題である。

今回の活動は一先ず区切りを迎えたが、和歌山県は、何年、何十年か後に起こる東南海・南海地震によって、必ず大きな津波の被害に見舞われる。この時に、素早く有効な活動を展開するために、「歴史資料保全ネット・わかやま」での経験を継承・発展させることが、今後の大きな課題である。

付記

本稿は、伊藤が参加した活動を中心にまとめた個人的な見解である。「歴史資料保全ネット・わかやま」の設立・活動の詳細は、藤本清二郎・前田正明・藤隆宏「台風一二号に伴う和歌山県内における被災資料の救出・保全活動について（中間報告）」（『ヒストリア』229号）を参照のこと。２月19日に、今回の活動を総括する公開フォーラムを開催した。後日、報告書を刊行し、『ヒストリア』へも最終報告を掲載する予定である。

末筆ながら、台風12号による甚大な被害を受けた方々に、心からお見舞申し上げます。

関西大学非常勤講師

弥生文化博物館の試み

正　岡　大　実

大阪府立弥生文化博物館

大阪府立弥生文化博物館（以下：弥生博）は平成３年２月に開館し、昨年２月に創立20周年を迎えた。この間、弥生博では平成18年度の指定管理者への移行など、幾つかの節目があったが、全国唯一の弥生文化を専門とする博物館として大阪和泉の地に佇んでいる。

本稿では、ここ数年の弥生博の取り組みのうち幾つかを紹介し、現在の博物館の成果と課題をみていくこととしたい。

弥生博は、和泉市と泉大津市にまたがる池上曽根遺跡に隣接するサイトミュージアムとしての性格と、弥生時代を専門にその文化の特質を明らかにするという目的のもとに創立されている。博物館の設立委員会に名を連ねた佐原真氏の信条でもあった「考古学を分かりやすく」という理念は、以後の弥生博の取り組みに当たって、大きな位置を占めてきた。

館長には、池上曽根遺跡の発掘調査において主導的な立場にあった金関恕が就任。以後現在に至るまで、その体制で運営されている。

写真１　大阪府立弥生文化博物館

博物館の特色

弥生博は20年前に創立された博物館であるが、当時としては斬新な取り組みを続けてきたユニークな博物館としても知られる。その特色はいかなるものか、ここで概観しておこう。

弥生博には大きく分けて３つの展示スペースがある。それぞれの部屋は、テーマごとに弥生文化をみる「第１展示室」、隣接する池上曽根遺跡を紹介する「第２展示室」、年間４～６回程度の企画展示を行う「特別展示室」の３室から構成されている。

特別展示室を除くこれらの常設展示室内では、弥生博の特色のひとつ「オープン展示」を行っている。これは、館の所蔵品やレプリカなどを中心に、可能な限りの多角度から資料を観察することができるよう、ガラスやアクリルなどのケースに収めない露出型の展示を行うものである。観覧者と展示物との距離を極力なくすというアプローチは「考古学を分かりやすく」の一つの在り方と言えるだろう。

写真２　展示室内写真ＯＫの標示

展示のもうひとつの特色は、館内の写真撮影についても表れている。開館当初は撮影不可であったものの、現在は常設展示室について常時写真撮影を許可しているほか、企画展示については可能な限り写真撮影を可能とし、来館者ニーズに応えることで、好評を博している。

このほか、弥生博独自の催しとして、開館当初から行われている「弥生ミュージアムコンサート」がある。この催しは、現在では年間20回程度実施しており、事業の継続的な施行によって、近年では出演者も多様化しており、様ざまなジャンルの演奏を楽しめる企画となっている。

写真３　新型展示補助具の導入

このように展示・企画の面でユニークな側面を持つ弥生博だが、創立後一定の期間を経過したこともあり、入館者数の減少傾向が一時顕著であった。そこで、これを解消するために行われている、近年の弥生博の取り組みを次に紹介したい。

近年の取り組み

弥生博で近年特に力を入れている取り組みが、「でかける博物館事業」である。「でかける博物館事業」とは、博物館の事業を積極的に博物館の外部で行い、博物館の存在をより一層多くの方に知ってもらうための取り組みである。

博物館の来館者ニーズのうち大部分は、もちろん博物館の主たる業務である展示にある。もちろん展示に際しては、最新型電子機器の導入や能動的に働きかけることのできる仕組みを導入して、展示への理解を容易にする取り組みを継続的に行ってはいる。しかしながら、子どもを含む幅広い層に対して、来館の動機を訴求するためには、弥生博の展示内容はややもすると専門的にすぎる傾向もある。それが「大阪府立弥生文化博物館」という存在のアピールに際し、わずかながらミスマッチを生じさせている側面は否めない。こうした齟齬を解消する手段として「でかける博物館事業」の展開は、弥生博にとって有効な解消法であった。

主要な出張先は、学校・他博物館施設・各種文化イベントなど。近年では、各種企業の催すイベントに参加する機会も増えてきている。こうした普及・啓発事業は、博物館の主たる業務の一つであるが、弥生博では、設立当初から学校教育のエキスパートを館員に迎え、普及・啓発にも大きく力を注いできた。

昨今では、教育委員会を通じた積極的な利用の促進案内と出前授業の積極的な営業活動によって、こうした取り組みの認知度も高まり、平成23年度には5年前に比して5倍近い実施回数に達している。

こうした学校教育の中でくみこまれた博学連携事業の中で、関心をもってくれた児童に対する次のアクションとして、現在弥生博では、「子どもといっしょに博物館に行こう」と題したキャンペーンを行っている。

これは、関連した学校に「持ち帰りプリント」として、各家庭に持って帰ってもらい、プリント持参の方は入館料を無料とするものである。出前授業における体験型授業の興奮そのままに、「入館無料」というアドバンテージを打ち出すことで、一定の効果を発揮している。

写真4　出前授業のひとこま

写真5　学校への配布資料

おわりに

以上、弥生博の取り組みをかいつまんでみてきた。それらはいずれも来館者にとって親しみのある博物館であるための模索ということに尽きるだろう。とはいえ、そうした取り組みも「博物館の存在自体を知らない」もしくは「知っているが行ったことがない」という人への「博物館へ行ってみよう」とする動機を持ってもらってこそのこと。こうしたコンセプトのもとに行われてきた「出かける博物館」などの事業は、博物館の存在を知ってもらう上で、一定の役割を果たしてきたといってよい。今後はさらに積極的なアウトリーチ活動を行っていくことが求められていると考えている。

大阪府立弥生文化博物館　学芸員

やきもの見聞録(4)　備前焼（岡山県）

太閤が愛したやきもの

熊　　博　毅

父が亡くなって1年の彼岸を迎えたころ、両親の遺影の前に一輪の菊花を捧げた。そのとき、ふと思い立って生前、父が愛用していた備前焼の徳利を花生としてみた。

それから数日経って、普段以上に花もちの良いことがわが家で話題となった。定期的に水替えをしているが、茎が傷まないし、水も臭くならないと家人は言う。そのとき、「備前花入　花が長持ち」と言い伝えられていたことを思い出した。ほかに「備前水瓶　水が腐らぬ」「備前徳利　お酒がうまい」という同意のことばがあったことも。

それ以前から備前焼には魅力を感じていたが、この不思議発見が、間違いなく今まで以上に私を強く備前焼に惹きつけることになった。

備前焼の歴史

備前焼の歴史をさかのぼると、6世紀中ごろに技法が伝わったという邑久郡の須恵器にたどりつく。この時期の須恵器窯では、地域内での消費用とともに、朝廷や官衙へ貢納するための品々が生産された。

平安から鎌倉時代にかけても備前焼は作り続けられるが、鎌倉時代の備前焼製品は壺、擂鉢（すりばち）、甕に限定され、山陽道や片上湾、吉井川の水運を利用して西日本各地に移出された。その結果、大型陶器においては「東日本の常滑焼、西日本の備前焼」という評価が定着する。

備前三耳壺（室町時代）
関西大学博物館蔵

赤褐色でよく焼き締り、日常生活になくてはならない壺や擂鉢、甕は、伝世するもの以外に、室町時代全期間を通じ、近畿地方以西の西日本全域から考古学の遺物として出土する。こうしたことから、この時期、備前焼は大量生産、大量消費の時代を迎えていたことが分かる。

太閤が愛したやきもの

備前焼の歴史を振り返るとき、茶の湯と深い関係があったことも忘れてはならない。関係史料は室町後半期から散見され始めるが、大きく開花したのは桃山時代。水指や建水、茶碗など、この時期に作られた名品の数かずが今に伝わっている。

そして、かの天下びと、太閤秀吉も備前焼を愛した人間の一人である。天正15年（1587）に主催した北野大茶会では、内外の名器と並べて備前焼の建水や花入を上座に据えているし、自身の埋葬棺として備前焼の二石甕を使わせたというエピソードも残っている。備前焼に対する太閤の愛着は並々ならぬものがあった。

その一方で、備前焼が大量生産されるのはもったいないと、一か所の窯だけを残して他のすべてを壊させたりもしている。愛するやきものは自分だけのものと考えるあたりが、天下びとの天下びとたる所以かもしれない。

備前焼の衰退と復興

中世後期から桃山時代に大量生産され、好評を博した備前焼であったが、江戸時代になると長期低落傾向を見せるようになる。そして半官窯的な存在として藩から援助と規制を受けつつ生産が続けられたが、明治の廃藩置県で窯元に対する藩からの援助が全くなくなると苦難の時代を迎える。明治から大正にかけては、土管や煉瓦の生産に活路を見出さざるを得なかったのが伊部の窯業であった。

しかし、第一次世界大戦後、日本の伝統文化が再評価され、桃山時代の瀬戸や美濃・伊賀・信楽・唐津・備前といった茶陶器が注目されるようになったとき、備前でもその伝統を復活させる動きが起きた。その魁となったのが金重陶陽であり、そのあとに続いた数多くの陶芸家た

ちの手により現代陶器として備前焼は新たな展開を見せている。

作品クローズアップ

備前焼では、これまでに金重陶陽、藤原　啓、山本陶秀、藤原　雄、伊勢崎淳の５人が国の重要無形文化財技術保持者（いわゆる人間国宝）となっている。このうち、今回は山本陶秀、藤原　雄、伊勢崎淳の作品をクローズアップしてみよう。

最初は山本陶秀の手による湯呑である。白い生地に濃厚で力強く、赤々と燃え立つ緋襷が際立っている。腰から胴にかけて微妙に膨らみながらも、ほぼ垂直に挽き上げられたラインは、上部で一旦内側に絞り込まれたあと、僅かに反って薄くシャープな口縁部を形づくる。「ろくろの名人」と言われて、他の追随を許さなかった山本陶秀の手わざが光る作品である。

次は藤原　雄が作った徳利。緋色に焼き締められた小ぶりの徳利の表面に降りかかったカセ胡麻を抜く形で描き出された丸い模様が、右下へと流れていく景色に、小気味よいリズムを感じることができる。藤原　啓、雄と親子で人間国宝となった名門の血筋が生み出した備前焼らしい逸品である。

３つめの作品は、高温の窯の中から出され、急激に冷却されることで、器の表面が黒く変色した引出黒の酒呑である。焼き締めるため、茶系統の色彩が主となる備前焼の世界に「黒」を取り入れたのが伊勢崎淳である。特に引出黒は、備前焼に新たな息吹を吹き込むことになった。

蒼黒く輝く器肌に茶色の激しい流れ胡麻。それらが集まって形づくる大きな玉だれ。液状化した胡麻が冷えて、つややかな鼈甲のようになった見込みの塊り。いたるところに魅力ある景色が看て取れる。伊勢崎淳の手による神秘の輝きを放つ酒呑と言えよう。

湯呑、徳利、酒呑と、いずれも小品であるが、それゆえに掌の上で匠の至芸を間近に堪能できるところが、こういう小物のうれしいところかもしれない。

岡山県備前陶芸美術館

備前焼のことを手軽に学ぶのなら、まずは岡山県備前陶芸美術館を訪れたい。JR 赤穂線伊部駅のそば、駅から歩いて１分と立地条件も抜群である。古備前から現代に至る名品や資料を

一堂に集めるこの美術館は、１階が企画展示室、２階が鎌倉時代から明治時代までの作品を集めた古備前名品展示室、３階は人間国宝館と岡山県重要無形文化財作家の作品展示室、４階は物故作家代表作品展示室となっている。また、一般には公開されていないが、備前焼研究の基礎を築いた桂又三郎が収集した備前焼に関する古文書や書籍、陶片などを収蔵した桂又三郎文庫も置かれている。

さて、話を冒頭の続きに戻そう。

結局、父母の遺影に捧げた黄色の菊花は、１カ月近くにわたって元気な姿を保ち続けた。備前焼が持つ意外な力をこの目で確かめ、昔からの言い伝えが真実であることを確認できたのは、亡き父が私に送って寄こした声なき便りだったのかもしれない。お蔭で私は、以前よりさらに備前焼の魅力を強く感じるようになった。父母に対する感謝と追慕の想いを込め、次はどのような花を飾ろうかと今、思案している。

学術情報事務局次長（博物館・出版担当、学芸員）

最近の近畿圏大学博物館事情

―平成23年度大学博物館調査から―

石　立　弥生子

大学という組織において、博物館はいかにあるべきか。現在、少子高齢化時代の生き残りをかけて、全国的に博物館の設置に関心を持つ大学が増えており、リニューアルや新設が相次いでいる。

前身の考古学等資料室から数えて50年以上の歴史をもつ関西大学博物館で働く者として、伝統に甘んじることなく、これからの方向性を考えたいと思い、近畿圏の約20館を見学する機会を得た。

本館は平成６年に博物館法に基づく博物館相当施設の登録を受けている。全国で750以上ある国公私立大学のうち同様の博物館を持つ大学は全体の約１割程度である。ただ、類似施設も含めると、総合系、歴史系、自然科学系、美術系、動植物系、水族系など多彩な館種の大学博物館が、平成23年10月現在で260館を超えて存在する。平成13年に株式会社トータルメディア開発研究所「日本の大学博物館」が行った大学博物館調査で115館だったものが、この10年で倍増したわけである。(「ユニバーシティ・ミュージアム研究の現状」九州産業大学美術館　緒方　泉)

そもそも大学博物館に関心が向くようになったのは、平成８年（1996）１月、学術審議会学術情報資料分科会学術情報資料部会「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について（報告）」で、大学博物館を研究拠点であるとともに「『社会に開かれた大学』の窓口として展示や講演会等を通じ、人々の多様な学習ニーズにこたえることができる施設でもある」と定義したことからである。

長引く経済不況から、文化面の充実は二の次とされがちだが、そういった苦しい時期であるがゆえに社会をリードする大学として、開かれた施設である大学博物館をうまく利用することは、大学のPRや独自性の開発にもつながり、これからの厳しい社会情勢を生き抜くための一つの施策となり得る。

特に京都では、大学の規模にかかわらず博物館施設設備の整備が進み、活発な展示公開や研究、市民講座などが行われており、まさに地域における文化拠点として、大学博物館が活用されていると感じた。見学に赴いた際にも、正門や主要通路のあちこちに、誘導掲示や行事案内が目立つように設置された大学が多く、不案内な者でも簡単に入場できるように配慮されていると思った。

大谷大学博物館

文化や教育に興味関心の高い一般市民が、大学博物館を訪れることは、展示資料の鑑賞以外にも副産物を生みだす。大学キャンパスや施設に対する印象は、入学志願者数に直接・間接的に結びつくであろうし、各種の意見は、大学の改善にも貢献する。

京都では、2011年度に京都市内外にある13大学14の大学博物館が連携して「京都・大学ミュージアム連携」を立ち上げた。実行委員会の委員長館である京都工芸繊維大学美術工芸資料館は、本学の学舎建築の多くを手掛けた村野藤吾の建築設計図面を多数収集していることでも有名である。ここでは、年間６～８回程度と頻繁に企画展を開催しており、私が来館した際にも、常設展以外に２つの企画展を並行して開催してい

京都工芸繊維大学美術工芸資料館

た。その展示内容は、初心者でも分かりやすく楽しんでみることができる一方で、最新の研究成果の公表や学生の参画を可能とするものとなっており、大学博物館として、教育・研究・社会貢献の３つのバランスがうまく取れていると感じた。

この連携には京都大学総合博物館をはじめ、立命館大学国際平和ミュージアム、花園大学歴史博物館、大谷大学博物館、京都精華大学京都国際マンガミュージアム、龍谷大学龍谷ミュージアムなど個性豊かで、活発な社会活動を行っている館が参加しており、今後の活動が期待される。

大阪大学総合学術博物館

ひるがえって、本館が位置する大阪であるが、大学数自体が京都と比較して少ないこともあり、大学博物館に対する関心が、関係者からだけでなく周囲からも薄いように感じた。ただ、大阪医科大学が2007年に歴史資料館をオープンし、大阪商業大学が今年度１年間かけて商業史博物館を改装するなど、博物館を活用する機運は高まりつつあると感じた。

本館も含めて大阪大学総合学術博物館や大阪大谷大学博物館のように入館無料のところも多く、キャンパスや周辺の散策も盛り込んで、大学博物館を拠点に戦略的に活用することで、地域の活性化につながるのではないか。

そんななかで豊中市にある、大阪音楽大学音楽博物館は、ユニークな活動を続けている在阪の館の一つであると感じた。広い空間に多数の音楽関連資料を展示することで、観覧者の興味関心を刺激し、貴重な楽器もオープン展示して実際に演奏することができる。また、展示室内には学生スタッフや学芸専門職が常駐しており、観覧者が声をかけやすい雰囲気作りができている。音楽専攻の修学旅行生をはじめ、国内外を問わず積極的に団体見学者を受け入れており、専門分野の解説や演奏会、研究活動など、活発に社会貢献活動を行っている印象を受けた。

大阪音楽大学音楽博物館

京都・大阪以外では、関西学院大学が、創立125年となる2014年の開設に向けて博物館開設準備室を立ち上げ、現在年２回程度の展示会を開催している。また、天理大学附属天理参考館の充実ぶりはいうまでもないが、奈良大学の博物館実習施設も大変充実している。

2012年度から施行される学芸員養成課程の新カリキュラムでは、積極的に「学内の附属博物館等」で「大学等が有する学術標本や研究資料等の資源」を活用した博物館実習を行うことが望ましいと明言している。「学の実化」を学是とする本学では、従来から行ってきたことであるが、一般公開施設としてだけでなく、本来の教育・研究面においても、大学博物館の充実は今後ますます必要とされてくるであろう。

今回の博物館調査を行うことで、本館の環境の良さを改めて感じたことは大きい。本館所蔵の本山コレクションは、2011年６月に登録有形文化財に登録されたが、これは国内の大学が保有する考古コレクションとしては初となる快挙である。また、歴史に興味があって本館を訪れる来館者には、自然豊かで活気ある大学の雰囲気（施設・設備・学生気質）を直接・間接的に感じてもらうことができる。

ただ、現状では十分な研究体制がとれず、残念ながらせっかくの資料を活かしきれていない。優れた資料を死蔵させることなく、広く教育・研究に活用してこそ、これからの大学の発展が望めると考える。先人の残してくれた遺産を十分顕彰して、これからの大学全体の発展への呼び水となるよう、博物館施設・設備の充実や研究体制の整備を行うことが喫緊の課題の一つであると改めて強く感じた調査となった。

関西大学博物館学芸員

◘ 博物館だより

◇平成23年度ミュージアム講座「なにわの文化遺産（6）吹田の文化遺産」では、99名の方から聴講の申込みをいただき、3日間開講しました。
10月17日「―歴史を中心に―」大阪都市遺産研究センター特任研究員　櫻木潤
10月24日「―建物を中心に―」環境都市工学部准教授　橋寺知子
10月31日「―祭りを中心に―」文学部教授　黒田一充

◇11月13日から18日まで博物館実習展を開催しました。今年度は「扇」「三味線」「和傘」「『無』電化」「ゆるキャラ」「すごろく」の6班が、博物館学課程の集大成として展示を構成しました。ゆるキャラ班が吹田市の着ぐるみ「すいたん」を招待するなど賑やかな展示会となり、会期中に903名のかたにご覧いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

◇平成23年6月、本館所蔵の本山コレクションが一括して登録有形文化財に登録されたことを受けて、11月27日に毎日新聞社と共同でシンポジウム「～本山彦一とその時代～末永雅雄との出会い、そして関西新世紀へ」を開催しました。2部構成で約250人の参加があり、菅谷文則・奈良県立橿原考古学研究所長や橋爪紳也・大阪府立大学教授らの話に熱心に耳を傾けました。また、これを機に本山彦一氏ゆかりの皆様から翁直筆の親書や短冊、若き日の肖像画をご寄贈いただきました。本山彦一氏の足跡を研究していくうえで大変貴重な資料であり、充分活用していきたいと考えています。

◇奥吉野で鍛錬場を構える刀匠　河内國平氏から作刀工程がわかる資料一式をご寄贈賜りました。河内先生には、12月16日の特別講演会「日本刀に学ぶ」でもお話しいただき、73名の聴講者は、当日披露された先生ご所蔵の日本刀を実際に手にとり、その美しさを堪能しました。ご寄贈いただきました資料は、いずれ特別展を開催して皆さんにご覧いただく予定です。

◇夏の耐震補強工事に続き、博物館施設の内装工事を行うため、1月6日から2月19日まで休館しました。

◇昭和47年3月21日、奈良県明日香村の高松塚古墳で壁画が発見されて40周年を迎えることを記念して、2月20日から3月21日まで、発見40周年の回顧展を開催しました。大学での研究成果の披露と発掘当時の写真パネルなどで当時を振り返りました。

◇本学理事の南部靖之氏から中国清朝の古端渓硯や墨などの文房具15件計17点をご寄贈いただきました。博物館でこれまで購入・収集してきた中国・朝鮮・日本のやきものと合わせて、4月1日から平成24年度企画展「東洋のやきもの、古硯と古墨」として一般公開いたします。会期は6月30日までとなっていますので、お誘い合わせのうえ、ぜひご来館ください。

・・・編集後記・・・

『阡陵』第64号をお届けいたします。表紙は、今年の干支にちなんで、白磁龍耳瓶（唐）です。7～8世紀の盛唐期に制作されたものであると思われる、ふくよかで温和な姿形は、唐朝の富裕にして自信のみなぎる国力と華麗な文化を物語るにふさわしい流麗さを兼ね備えています。

故末永雅雄先生らとともに博物館創設にご尽力された横田健一先生が平成24年2月6日、享年95歳で永眠されました。心からご冥福をお祈りいたします。

3月末をもって高橋隆博館長が定年のため退任いたします。平成14年に第4代博物館長として就任して以来、10年の間、八面六臂の活躍で関西大学博物館の陣頭指揮をとられました。在任中の関係各位のご支援ご厚情に感謝いたします。

関西大学博物館彙報　No. 64　平成24年3月31日　発行
関西大学博物館　編集